

「シリーズ平和教育学」(2024.1.12)

「次世代による戦争体験継承」における質問と意見、それへの回答

○ありがとうございました。対話について具体的に、矛盾を作る。自分の意見をもつ。友達と考える、まずは、自分の問題を作る。

Q. 表3のモデルはどのような過程・方法で分析・提案されたものでしょうか？

A. 「表3 戦争体験継承への当事者意識の形成過程のステップ・モデル」については、配付資料の参考文献に記した次の文献に記載されていますので、ご参照下さい。
(村上登司文 2018、[「戦争体験を第4世代（次世代）に語り継ぐ平和教育の考察」](#)『広島平和科学』40号。) 上記文献では、「表5 戦争体験継承への当事者性の形成過程モデル」と記載し、詳しく説明しています。

○ガイド活動をしていると言葉の解説から必要になり、時間はかかりますが伝えたいという思いは伝わります。聞いてくれて反応があるとやってよかったと思うので伝えることは続けたいです。

○真に体験を継承する、ということには、なんらかのステップが必要なのかもしれません、と思いながらうかがいました。

Q. 平和教育研究を専門的に学びたいと思っているのですが、平和教育研究の最先端は国内、国外の大学でそれぞれどこでしょうか？

A. 最先端を、研究科があり授業が開設されており、専門の研究者がいると想定すると、国内で「平和教育研究」の最先端を特定することは難しいです。平和学についてはいくつかあると思います。海外の平和教育研究については、主要な文献として次の文献があります。

Salomon and Nevo eds., 2002, *Peace Education: The Concept, Principles, and Practices*, (Lawrence Erlbaum Associates, Publishers) .

Journal of Peace Education, Vol.1, No.1 (Mar. 2004—).

Bajaj, Monisha ed. 2008, *Encyclopedia of Peace Education*, (Information Age Publishing).

Salomon, Gavriel and Edward Cairns eds. 2010, *Handbook of Peace Education*, (Phycology Press) .

Lum, B. Jeannie ed., 2021, *Peace Education: Past, present and future*, (Routledge) .

○今日の話聞いて、いかにして戦争体験のみならず平和創造のための価値観に基づくメッセージを日本社会から発信していけるのか、ということを考えました。

○大日本帝国が昔起こした戦争の惨禍を苦心して伝承している傍らで、ウクライナやガザで泣き叫ぶ子どもや遺体の映像が、いま毎日のように目に入ります。子どもたちの中にどのような戦争観が作られているのか気になっています。

Q. 平和形成に向かう平和教育は、実際に平和につながるような行動を学習者が起こすことを求めると思います。しかし行動を起こすとすると、生徒が批判的等となるような恐れもあります。すでに行われた実践でそのようなリスク管理の例があれば教えてください。

A. この課題は次回のテーマ「平和教育のカリキュラム」においても、考えたいと思います。なお、インターネット発信でのリスク管理は、以下の点があります。現在はインターネットより多くの情報を得ることができるが、有用無用の情報が混ざっているため、情報の利用には注意する必要があります。ホームページを利用すれば、現在は自分たちのホームページを作って社会へアピールすることができる。しかしそれは同時に、子ども達の意見を社会の人々の目にさらすことにもなる。教師の教育内容と方法が偏向していないか問われることがあるかもしれない。平和な社会の形成に向けて、子ども達に社会参加を促したいが、子ども達を政治的論争に巻き込んでほしくない。論争題 (controversial issue) を教材として扱う際は、教師はバランスある教材を中立的に扱うなど、平和問題の教育方法を、留意する必要があります。論争題を教える際は、賛否両論を説明し子どもに考えさせるスタンスを取るなど教材のバランスと教師の中立的態度が望まれます。

Q. 子どもたちが戦争体験を学ぶ対象、他国で父母の割合が高いのはどうしてでしょうか。日本でその割合が低いのも気になります。

A. 割合が高いのは、父母の関心が高いからだと思われそうですが、実証的にその理由がデータとして析出されていません。ただし、それぞれの国で語られる戦争体験の「内容」は異なっており、イギリスでは自国による正当な戦争、ドイツではナチス政権下による迫害や近隣諸国への侵害、イスラエルでは第二次大戦中のユダヤ人への迫害の歴史などです。こうした語られる戦争の内容によって、子どもたちの戦争への意識や態度観は異なってきます。

Q. 次世代型の平和教育を、学校教育の現場に広めていく(実装させる)ために、今、1番必要な事は何か? 従来型の平和教育ではなく、新しい平和教育を教室でやろう

と思っても、現状では、よほど聞心のある先生が、たくさん時間をかけないと、準備ができません。

A. 次世代型の平和教育を実装させる方法として、平和教育のカリキュラム化という視点から、次回に考えていきます。

○とても興味深いお話をありがとうございます。参加者で音声をオンしている方はオフにしてください。

○多様な形で戦争の語り継ぎが展開されていることが理解できました。また、「つなぐ」というガイドの役割は本当に重要だと感じました。

Q. 次世代の伝承者が語る際に体験者や語り部が語るのに対して特に注意すべきことはあるでしょうか。

A. まず、語る内容が、記録や証言などで歴史的に実証されていること。教え方として、聞き手の考える力を育成する方法であり、聞き手を教化する方法でないこと。遠い戦争体験に対して、「人」や「もの」や「場所」で繋がるようにして、聞き手が身近なものと感じることができる工夫があれば良いといえます。